高校運動部活動の魅力を探る

－富山県高体連における追跡調査を通して－

富山県高等学校体育連盟研究部

1　はじめに

2016 リオデジャネイロオリンピックでは、柔道の田知本遥選手、レスリングの登坂絵莉選手の二人が、本県出身選手として初めて個人種目で金メダルを獲得するという快挙を成し遂げた。また同パラリンピックでは、同じく本県出身のボッチャの藤井友里子選手が団体で銀メダルを獲得した。スポーツは人々に感動と勇気を与えることができるが、とりわけ今大会の本県出身選手の活躍は県民の誇りとなり、子どもたちの心に大きな感動と夢を育むことになった。加えて長年、学校部活動や地域のスポーツクラブ等で選手の育成に励んできた多くの指導者にとっても、日ごろの苦労が報われる朗報であった。

その一方で、本県の高校運動部活動においては、少子化による生徒数の大幅な減少や、子どもを取り巻く環境の変化による生活習慣や価値観の一層の多様化の進行などにより、設置部活動数や種目ごとの部員数の動向等に変化が見られる。また教員の多忙化や行き過ぎた指導への批判など、様々な課題が指摘されており、その改善に取り組み、指導の質を着実に高めていくなど、生徒の実態に即した運動部活動の新たな魅力を創出していくことが重要となっている。

このような状況を踏まえ、本県高等学校体育連盟研究部では、これまでも高校運動部活動の一層の充実に向け調査研究を行ってきたところであり、平成 12 年度からは、従来の「競技力の向上、安全、普及」の研究領域に新たに「生徒減少期における運動部活動の諸問題」の領域を加え、本県の実態に即した具体的な検討を行ってきた。

（第１期　生徒減少期における運動部活動の活性化）
　平成１２～１３年度　「普及・今、求められる部活動（合同部活動）」
　平成１４～１５年度　「合同部活動の現状と今後について」
　平成１６～１７年度　「合同部活動を考える」～今、なぜ合同部活動を考えないといけないのか～
（第２期　魅力と活力ある高校運動部活動の推進）
　平成１９～２１年度　「一人一人が満足感・充実感を味わえる取り組みについて」
　平成２３～２５年度　「高校運動部活動の魅力の発信」
　　～中体連と高体連が連携して実施したアンケート調査結果から～
　平成２６～２８年度　「高校運動部活動の魅力を探る」～富山県高体連における追跡調査を通して～

今回の発表では、①毎年実施している本県の運動部活動加入状況調査や②上記の中学校体育連盟と連携して実施した第２期の調査において把握した生徒の動向等とともに、③田知本遥選手などのオリンピック選手を輩出してきた本県の柔道、ホッケー、ハンドボールでの実践事例と④県や県体育協会等の支援の一端を紹介し、生徒減少期における運動部活動のさらなる魅力の創出に向け考察を行うこととした。

県民栄誉賞受賞式での恩師と両選手

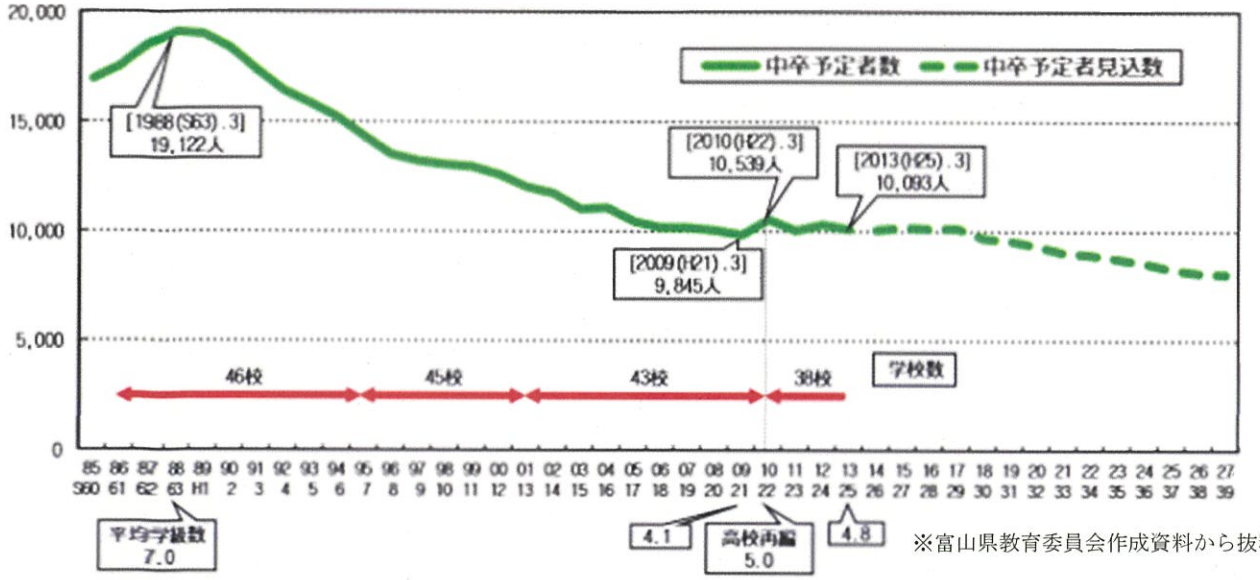
未来のアスリート発掘事業　富山県体育協会

2　本県における少子化と運動部活動の概況

（1）中学校卒業者数の減少と運動部活動

図１に見るように、本県の中学校卒業者数は昭和 63 年 3 月卒の 19,122 人をピークに、最近は 1 万人前後で推移しており、今後はさらに減少し、平成 34 年には 9,000 人を割り込むと見込まれている。これにより昭和 63 年には 1 校当たりの平均学級数が 7.0 学級であったものが、平成 21 年には 4.1 学級となり、各校の生徒数も教員配置数も減少し、多くの高校で運動部活動の規模が縮小することになった。平成 22 年 4 月には、県立高校 43 校を 38 校に統合する高校再編により、平均学級数は 5.0 学級と若干回復したが、今後、中学校卒業者数が急激に減少することから、さらなる運動部活動の規模縮小が懸念される。

〔図１　中学校卒業予定者数の推移及び見込みと全日制県立高校の学校数の推移〕

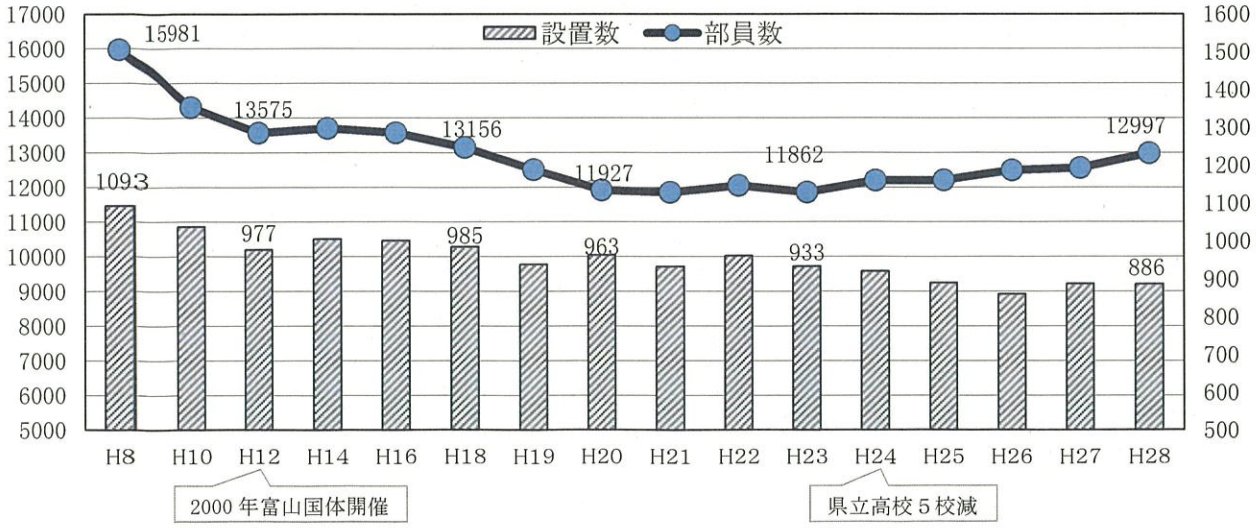


※富山県教育委員会作成資料から抜粋

（2）運動部活動への加入状況

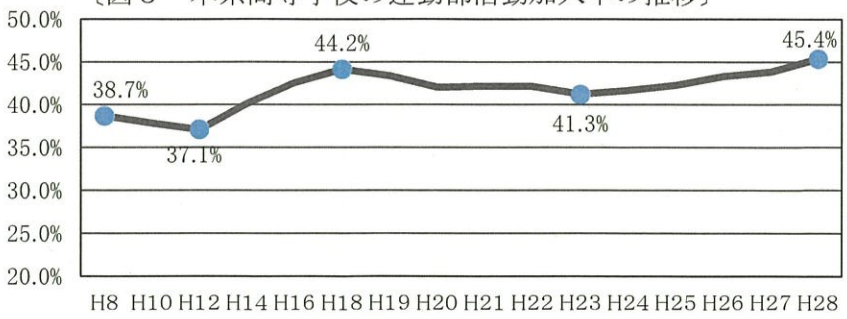
図２は、本県の高等学校における運動部活動設置状況及び部員数の推移（平成８～28 年度）を示している。年度によって増減はあるが、少子化による中学校卒業者数の減少及び学校規模の縮小に伴い、設置部活動数や部員数が減少してきたことが見て取れる。しかし近年は部員数が増加傾向にある。これは朗報であり、この間の中学校卒業者数が 1 万人程度で推移し比較的安定していたことや、運動部活動への入部を促す各校での地道な働きかけが成果となって表れたものと考えている。

〔図２　本県高等学校における運動部活動の設置数及び部員数の推移〕



これを加入率で見ると、図３のとおり、今年度（28 年度）が 45.4%となり、平成８年以降で最高となった。少子化に目を奪われがちだが、この改善傾向の要因については今後さらに掌握していきたい。

〔図３　本県高等学校の運動部活動加入率の推移〕

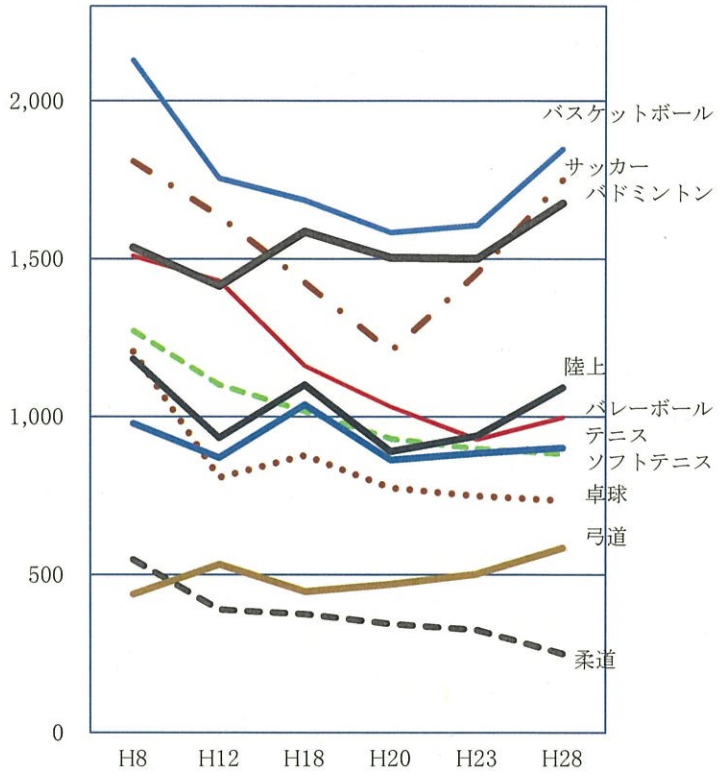


（３）種目別の加入状況

図４及び表１は本県の高等学校における種目別の加入率を平成８年度と本県で国体が開催された平成 12 年度、10 年前の 18 年度、部員数の減少が下げ止まりした 20 年度、23 年度と現 28 年度を比較したものである。平成８-28 年度間で部員数が大きく減少したのはバレーボール、卓球、ソフトテニスの順で、スキー、レスリング、柔道は減少割合が大きい。その一方でバドミントン、弓道は部員数が増加している。サッカー、陸上、テニス、バスケットボールの部員数は平成８年度の８～９割以上に回復しており、平成 23 年度以降の増減も種目によって大きく異なっている。

サッカーでは地域リーグを導入したことで、部員全員がレベルに応じて試合に出場することができるようになり、平成 20 年度以降のＶ字回復につながったものと考えられる。

〔図４　種目別の運動部員数の推移（10 種目）〕



〔表１　本県高等学校における運動部活動の種目別の部員数の推移（15 種目）〕

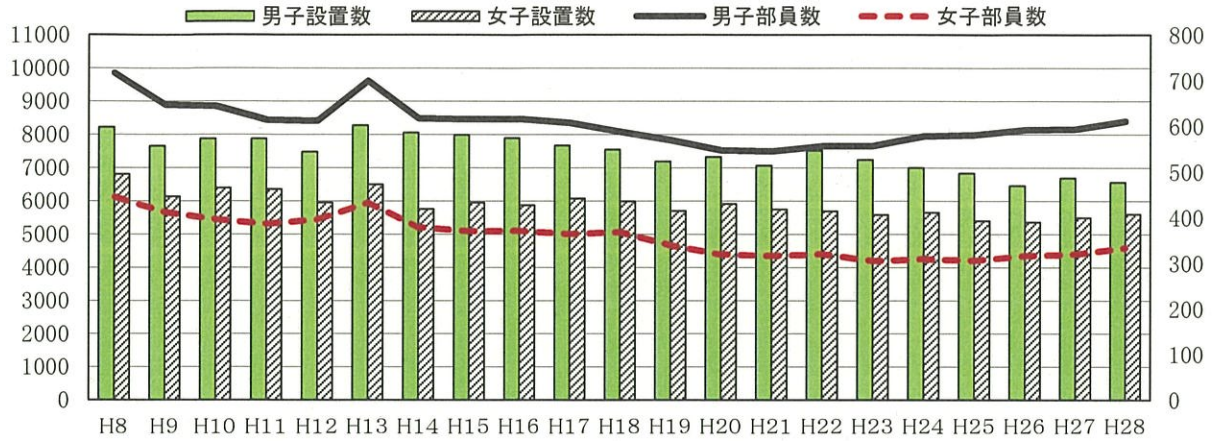
No.	加盟種目	H8	占有率	H12	H18	H20	H23	H28	占有率	H8-H28	H8-28割合	H23-H28
1	バレーボール	1,510	9.4%	1,430	1,161	1,031	928	998	7.7%	▲ 512	66.1	70
2	卓球	1,206	7.5%	808	877	774	749	735	5.7%	▲ 471	60.9	▲ 14
3	ソフトテニス	1,272	8.0%	1,101	1,017	930	899	882	6.8%	▲ 390	69.3	▲ 17
4	柔道	548	3.4%	389	375	343	324	249	1.9%	▲ 299	45.4	▲ 75
5	バスケットボール	2,129	13.3%	1,755	1,686	1,583	1,607	1,847	14.2%	▲ 282	86.8	240
6	剣道	686	4.3%	630	510	440	348	452	3.5%	▲ 234	65.9	104
7	スキー	208	1.3%	92	48	48	43	38	0.3%	▲ 170	18.3	▲ 5
8	ハンドボール	626	3.9%	450	457	482	414	471	3.6%	▲ 155	75.2	57
9	陸上	1,183	7.4%	933	1,101	890	939	1,092	8.4%	▲ 91	92.3	153
10	テニス	979	6.1%	870	1,038	863	884	902	6.9%	▲ 77	92.1	18
11	レスリング	105	0.7%	68	59	50	56	41	0.3%	▲ 64	39.0	▲ 15
12	サッカー	1,809	11.3%	1,635	1,425	1,207	1,455	1,749	13.5%	▲ 60	96.7	294
13	ホッケー	109	0.7%	75	64	55	71	81	0.6%	▲ 28	74.3	10
14	バドミントン	1,536	9.6%	1,414	1,586	1,503	1,500	1,676	12.9%	140	109.1	176
15	弓道	438	2.7%	532	446	470	502	584	4.5%	146	133.3	82
運動部員数全計		15,981	－	13,575	13,156	11,927	11,862	12,997	－	▲ 2,984	81.3	1,135

※表中の占有率は該当年度の運動部員数全体に対する割合、H8-28 割合は 28 年度の対 8 年度の種目別の部員数割合を示す。

（４）加入状況における男女差

図５は本県の男女別の運動部活動の設置数と部員数の推移を表している。男子に比べ女子の設置数、部員数が一貫して下回っている。全生徒に対する加入率も平成 28 年度で男子 58.4%、女子 32.3%と、明らかに男女差が見られる。女子生徒にとって魅力ある運動部活動を創出することが、状況を大きく改善する大事な要因と考えられる。

〔図５　本県高等学校における男女別の運動部活動の設置数及び部員数の推移〕



３　中学・高校７年間の中・高体育連盟研究部員による生徒意識調査から

次に、本県高等学校体育連盟と中学校体育連盟が連携して実施した中学３年次、高校１年次、高校３年次の意識調査に基づき考察を行いたい。

（１）調査の概要

ア　調査方法　　質問紙によるアンケート調査（無記名方式）中学３年次の対象生徒を追跡調査

イ　実施時期・調査対象　※調査対象は中・高の体育連盟研究部員の勤務校の生徒

１回目　中学３年（平成２３年１０月～１１月）・16 校　1973 人（男子 988 人、女子 985 人）

２回目　高校１年（平成２４年１０月～１１月）・66 校　1814 人（男子 894 人、女子 920 人）

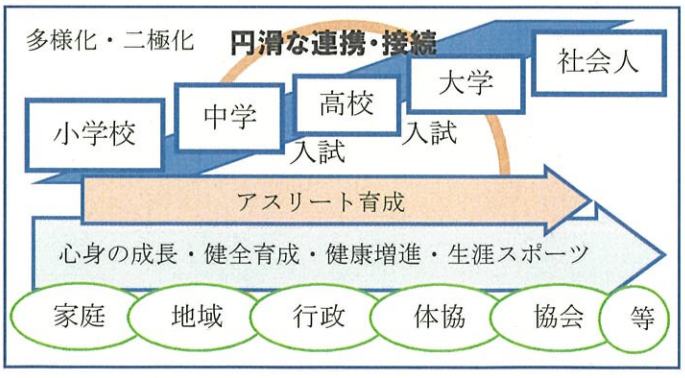
３回目　高校３年（平成２６年１０月～１１月）・26 校　 722 人（男子 352 人、女子 370 人）

（２）中学生の部活選択と継続意思（中学調査から）

中学３年次の調査では、小学校での運動活動についても質問した。「中１ギャップ」と言われるように小中間には大きな段差がある。同様に中高間にも、高大間にも段差があり、それを円滑につなげていく地道な取り組みが魅力を高めていく基本と考えている。

また、運動部活動は学校のみの限られた資源だけでは、なかなか活動の充実は図れない。学校間の段差を乗り越えて充実した活動ができるよう、まずは中高間の連携を見直すことが大切である。中高間の円滑な接続に向け、双方の指導者が日常的に情報交換できる仕組みが必要だと考えている。

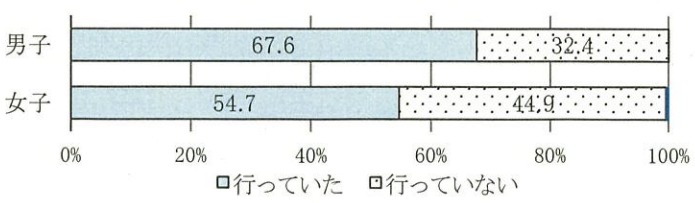
〔多様で円滑な連携･接続推進のイメージ〕



ア　小学生のスポーツ活動

図６に見るように、小学校でスポーツ少年団等に所属し活動していた生徒は男子 67.6%、女子 54.7%であった。男女とも半数以上が活動していたことになる。

〔図６　小学校時代のスポーツ少年団等の所属割合〕



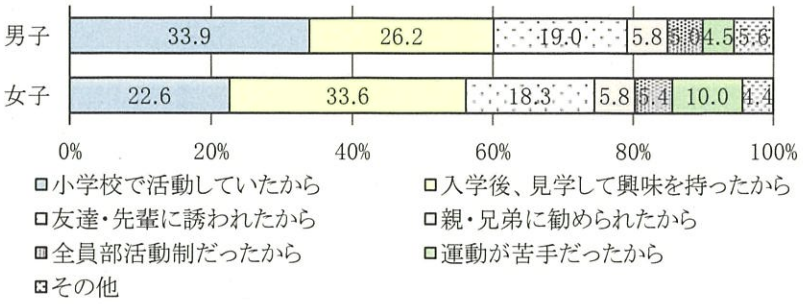
イ　中学生の運動部活動の選択と満足度

図７に見るように、中学１年次の選択理由では「小学校で活動していた」が男子 33.9%、女子 22.6%であった。中学校においても継続する生徒のニーズに応じた配慮が大切である。

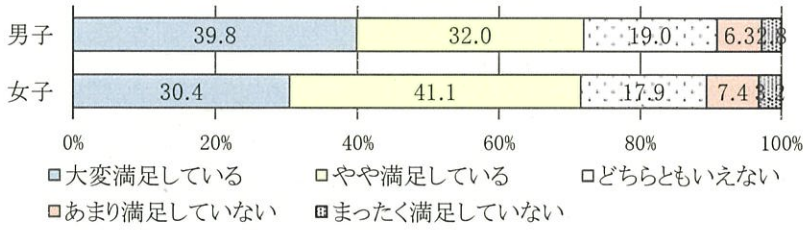
一方、見学して「興味を持った」「誘われて」との回答が半数以上を占め、また女子では「運動が苦手とする回答が１割あり、ともに入学時期の丁寧な働きかけが大事である。

図８は中学生の満足度合い示している。「大変満足」「やや満足」を加えると男女とも７割を超える高い割合である。図９の満足した理由では、男女とも「みんなと楽しく活動できた」が６割近くと群を抜いている。多様な生徒に対し、各レベルに応じて、「みんなと楽しく」活動できる場とすることが魅力創出の重要な観点と言えよう。

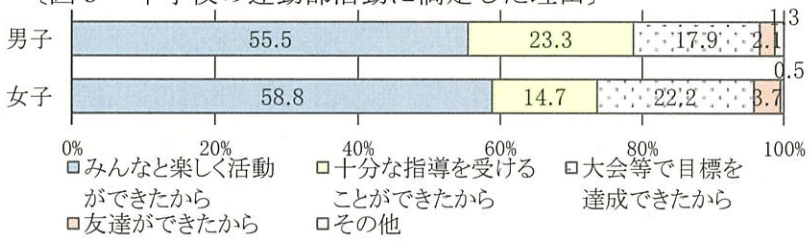
〔図７　中学１年次の部活動選択の理由〕



〔図８　中学生の運動部活動の満足度合い〕



〔図９　中学校の運動部活動に満足した理由〕



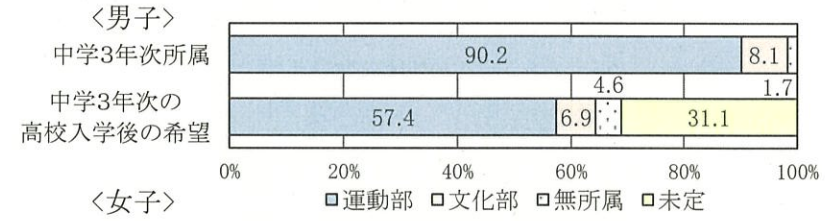
ウ　中高間の運動部活動の継続意思

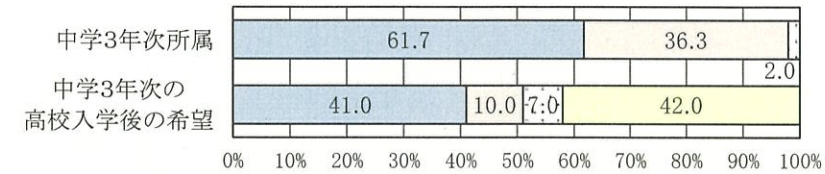
図 10 は高校１年次に①中学３年次の部活動所属と②中学３年次に希望していた高校入学後の部活動所属を聴いた結果である。中学３年次では男子の 90.2%もが運動部に所属し、女子は 61.7%であった。

高校で運動部に所属したいと継続意思を示した男子は 57.4%、女子は 41.0%であった。そのうち中学校と同じ種目を希望したのは男子 38.4%、女子 15.1%、違う種目を希望したのは男子 19.0%、女子 15.2%であった。

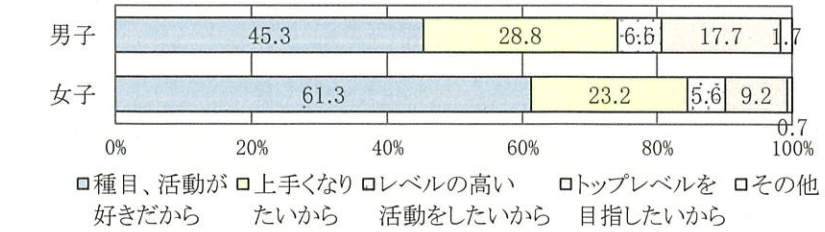
図 11、12 のとおり、同じ種目を継続する理由では、男女ともその「種目が好きだ」が極めて高く、次が「うまくなりたい」だった。違う種目では「新しいことにチャレンジしたい」が突出し、新しい環境への期待感が明確に表れた。

〔図 10　中学３年次の部活動所属と中高間の継続意思〕

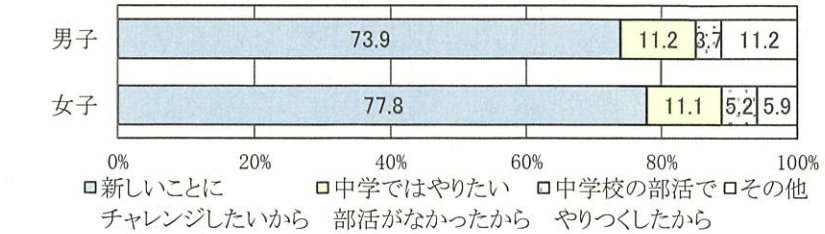




〔図 11　高校で中学校と同じ種目を継続する理由〕



〔図 12　高校で中学校と違う種目を希望する理由〕

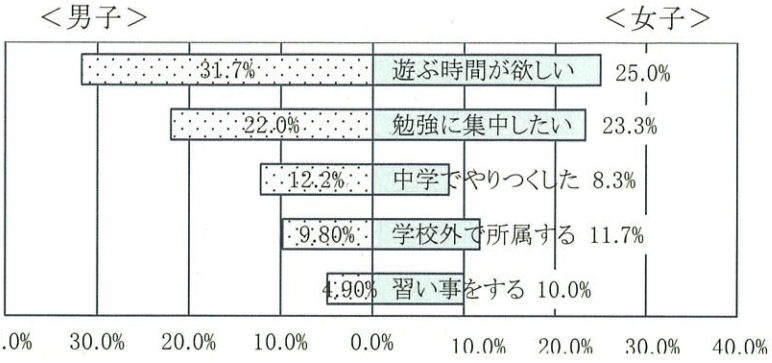


このような生徒が抱く高校生活への夢や希望に応えるよう、高校ならではの新たな種目にチャレンジしやすい環境を整えることも、魅力を創出する大きな要因になると考えられる。

エ　運動部活動を継続しない理由

また、図11では男子の４%、女子の７%が高校では「無所属」と答え、部活動はやらないとした。理由は図13のとおり「遊ぶ時間が欲しい」「勉強に集中したい」「中学でやり尽くした」の順である。最近はスマートホンなどの普及で、LINEなどのSNSやゲームに多くの時間を費やす生徒がいる。このような生徒たちも部活動の魅力を体感し、「みんなと楽しく」リアルな体験を充実していくことができるような教育的な配慮が望まれる。

〔図13　高校入学後に入部しない理由上位５項目〕



（３）高等学校入学後の部活動選択と運動部活動の実際（高校調査から）

高校入学後、どのように部活動を選択し、また実際の運動部活動に参加してどのように感じているか、その概要を意識調査結果から以下に示したい。

ア　高校１年次の部活動所属と選択理由

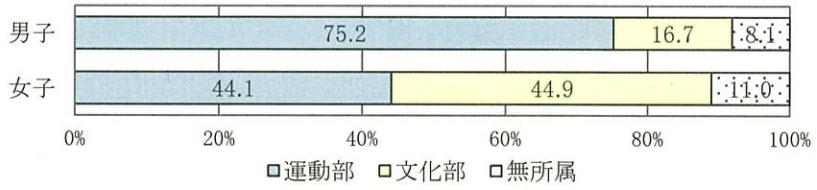
図14にみるように、高校での運動部の所属割合は、男子72.5%、女子44.1%であった。男女とも中学より２割程度低下し、女子は文化部の割合が運動部を上回り、中学と逆転する。

図15は、運動部を選択した理由である。「体をうごかしたい」「スポーツがおもしろい」「運動部がおもしろかった」が高い割合を占め、中学で運動・スポーツを楽しんできた経験に基づく選択となっている。

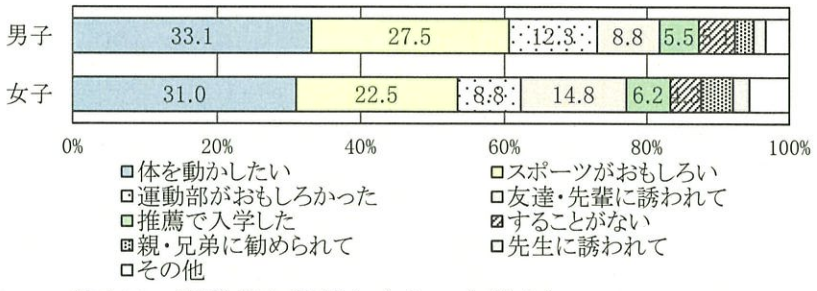
また図16の運動部を選択しなかった理由では「文化部に入りたかった」との積極的な理由に対し、「運動が苦手」「興味がない」と特性や先入観等よる消極的な回答も多く、多様な生徒が運動・スポーツを楽しめるよう工夫することも必要である。

「入りたい部がなかった」との回答については、中学校卒業者数の減少により、本県の県立高校では３学級以下の小規模校が増えてきており、生徒の多様な希望に応えるには、一定の学校規模を確保し、指導体制を整えることが基本となる。

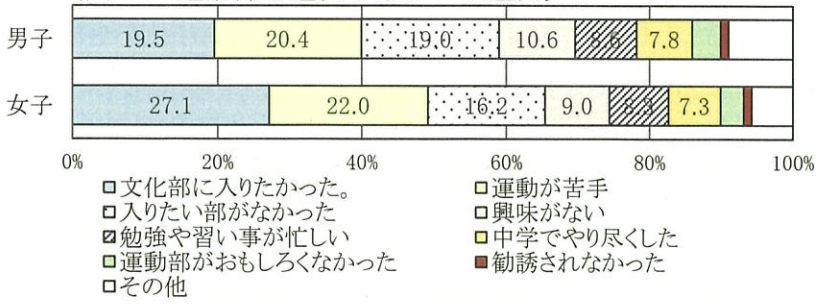
〔図14　高校１年次の部活動所属〕



〔図15　高校で運動部を選択した理由〕



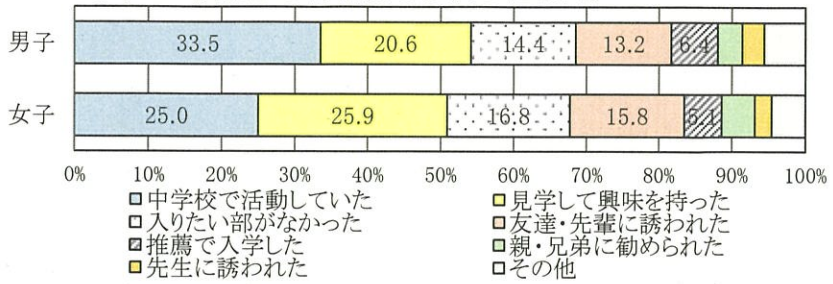
〔図16　運動部を選択しなかった理由〕



イ　種目別の中高間の継続率と開設数

図17は高校で所属した部活動（競技種目等）を選んだ理由である。中学１年次の部活動選択と同様に、「中学で活動していた」「見学して興味を持った」「友達・先輩に誘われた」の割合が高かった。

〔図17　所属する部活動を選択した理由〕



さらに、表２から中高間の運動部活動の種目別の継続率を見ると、男子ではバスケットボール、サッカー、バドミントン、バレーボール、陸上競技の順で５割を超えている。女子ではバスケットボールのみが５割を越え際立っている。

〔表２　中高校間の運動部活動の種目別男女別継続率と開設数〕

男子			女子		
種　目	継続率	開設数	種　目	継続率	開設数
バスケットボール	63.6	49	バスケットボール	64.5	43
サッカー	60.0	44	陸上競技	40.9	45
バドミントン	59.7	41	バドミントン	38.6	43
バレーボール	56.3	23	バレーボール	35.4	43
陸上競技	50.8	45	卓球	29.4	33
野球	46.8	47	剣道	28.9	25
剣道	42.9	31	ソフトテニス	21.7	26
ハンドボール	38.7	14	ソフトボール	19.2	18
卓球	37.3	43			
ソフトテニス	33.8	25			
柔道	29.3	20			

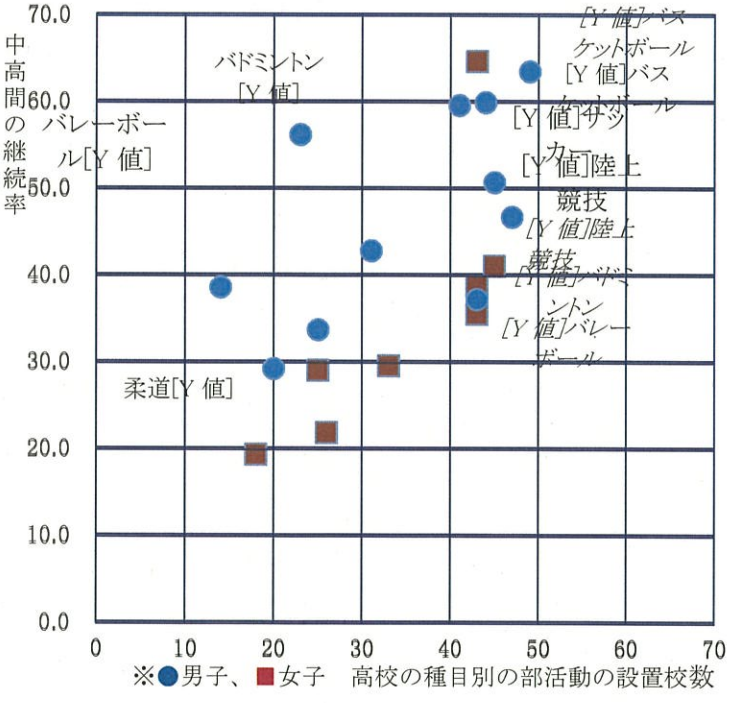
※継続率は中３に所属していた運動部を高１で継続した種目別の人数割合、※開設数は平成24年度の県内55（公立43私立10国立高専2）校における各種目別の部活動開設校数

図18は高校における種目別の設置校数と継続率の分布を示している。設置校数と中学・高校間の継続率に一定の相関が見られるが、生徒減少に伴い各学校で部活動設置数を減少させざるをえないなかで、生徒の希望を踏まえ部活動が存廃されてきた場合が多い。

バスケットボールは男女ともに継続率が第１位であり開設数も多い。しかし開設数が多くても種目によって継続率が大きく異なっている。希望に応じた部活動を開設し、魅力ある活動を展開することが肝要である。

また本県では、全ての高校に第１・第２の２つの体育館を整備しており、室内種目には好条件となっている。

〔図18　高校の種目別の部活動設置校数と中高間の継続率〕



ウ　高校運動部活動のイメージと実際

図19は高校入学前の高校運動部活動に対する中学３年生のイメージである。男女ともに「レベルが高くやりがいがある」とする積極的な回答と、「練習が厳しそう」とする回答の割合が高い。

〔図19　中学校３年次の高校運動部活動のイメージ〕

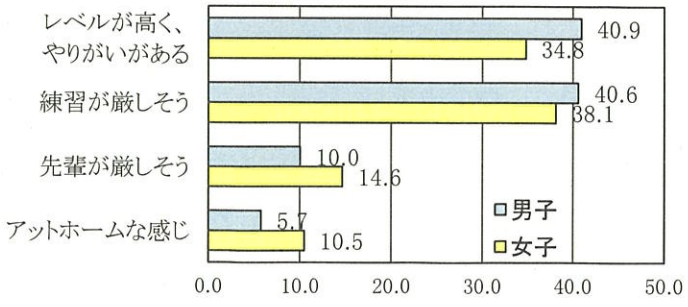
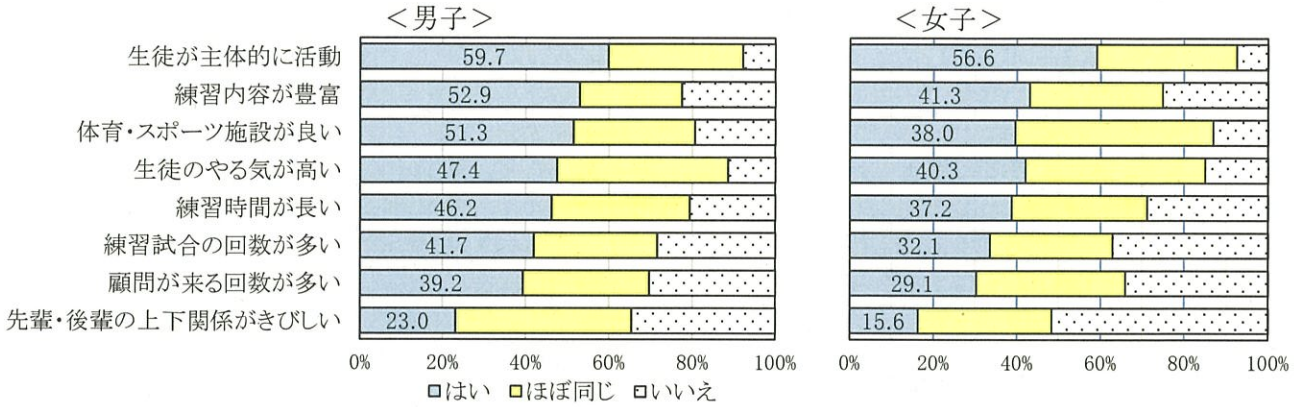


図 20 は高校入学後に運動部活動に所属し、中学校の部活動と比べてどのように感じているかを３択で聴いた結果である。「生徒が主体的に活動している」「練習内容が豊富」「体育・スポーツ施設が良い」「生徒のやる気が高い」と積極的な評価をする割合が高かった。また「先輩・後輩の上下関係が厳しい」とする割合が低く、高校入学前は「練習が厳しいそう」「先輩が厳しいそう」との不安もあったが、入部後は安心して主体的に取り組んでいる様子が伺える。中学生の不安を解消するよう、中学校体育連盟とも連携を図りながら、高校の運動部活動のよさを中学生に周知することが大切である。

〔図 20　高校の運動部活動に所属しての認識〕



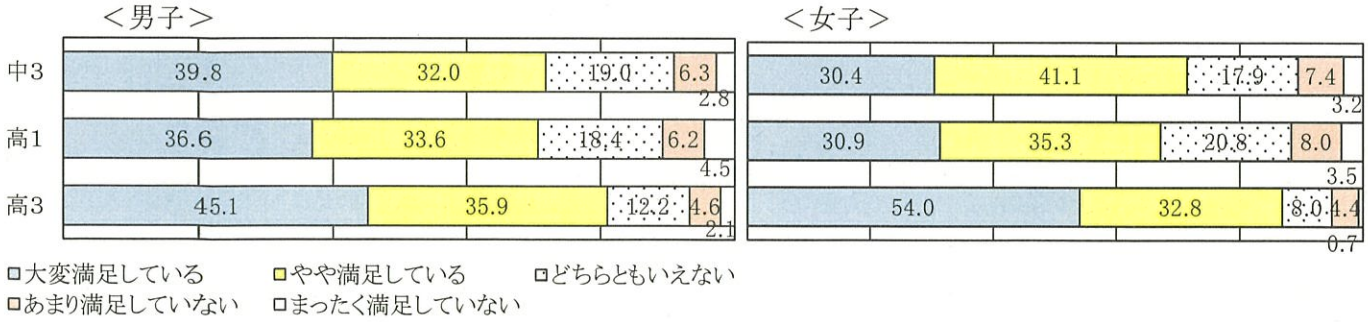
（４）高校運動部活動の満足度合い

運動部活動やスポーツに親しむ継続意思を育てるには、日ごろの活動を通して、種目そのものの魅力を体感し、また同級生や先輩、後輩等とともに達成感や成就感を味わうなど、満足度を高める様々な要因がかかわるものと考えている。以下、運動部活動に対する生徒の満足度合いについて検討を加えたい。

ア　運動部活動の満足度合い

図 21 に見るように、中学3年次では男子 39.8%、女子 30.4%が「大変満足」と回答した。高校3年次では男子 45.1%、女子 54.0%が「大変満足」と回答している。女子については高校で運動部活動を選択する生徒は減るが、運動部を選んだ生徒の満足度合いは高まっている。

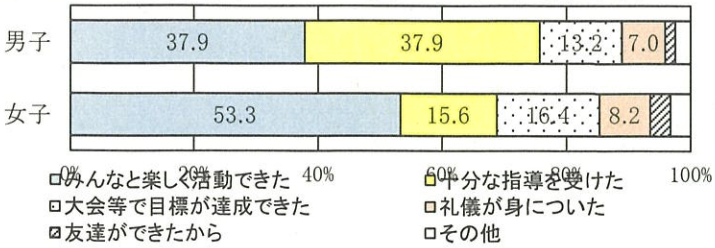
〔図 21　運動部活動の満足度合い〕



イ　満足の理由

図 22 に見るように「大変満足した」は、男女ともに「みんなと楽しく活動できた」の割合が高く、特に女子で顕著である。男子は「十分な指導を受けた」が「みんなと楽しく」と同じ割合である。中学と同様に「みんなと楽しく」が満足の度合いを高める根本的な要因である。

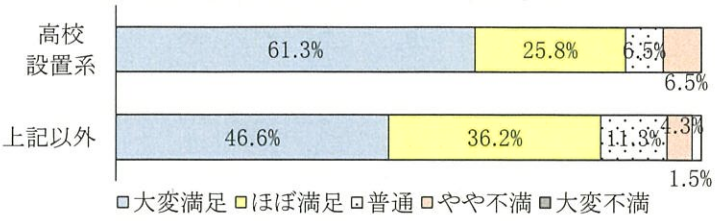
〔図 22　運動部活動に大いに満足した理由(高３次)〕



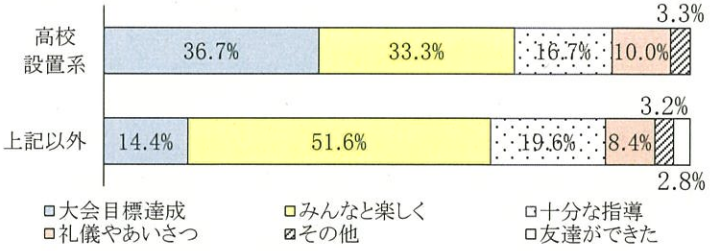
ウ　主に高校のみに設置されている種目の特徴

ボート、レスリング、弓道、登山、ボクシング、ホッケー、ウエイトリフティング、ヨット、フェンシング、自転車、なぎなた、空手、ライフル射撃、ゴルフの各種目は、高校入学以前においてもスポーツクラブ等で活動が行われているが、学校部活動としては高校から設置される場合が多い種目（ここでは「高校設置系」と呼称する）である。この高校設置系の部員数は本県運動部員数全体の１割程度であるが、図 23、24 に見るように満足度合いが高く、大変満足できた生徒は「大会目標が達成できた」を理由の一番にあげている。

〔図 23　高校設置系の満足度合いの比較〕



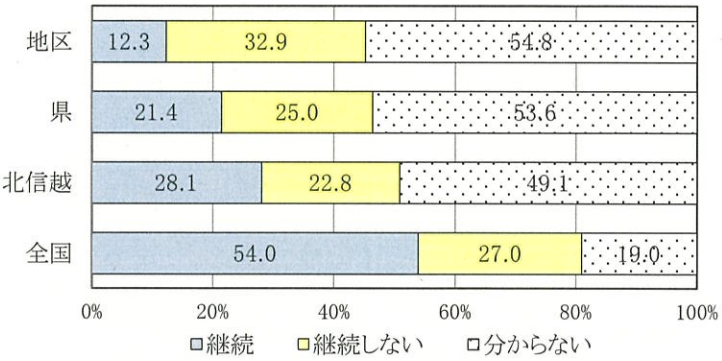
〔図 24　大いに満足できた理由〕



エ　大会成績と継続意思

図 25 に見るように、全国大会に出場するなど大会成績が良いほうが、継続意思が高くなった。全国大会等に出場した生徒は、卒業後も選手として競技種目を継続する場合が多いことを示していると考えられる。

〔図 25　高校における大会成績と継続意思〕



オ　種目別の満足度合い

種目別で大変満した割合を比較すると、ハンドボールが中学 56.8%、高校 68.8%とともに高い。続いて、野球・サッカー・陸上競技の割合が中学・高校ともに高い。また高校設置系のライフル、ウエイトリフティング、レスリング、弓道の割合が高くなった。本県のハンドボールやライフル、ウエイトリフティングは全国大会での成績が優秀であり、満足度合いを高くしていると思われる。またハンドボールについては事項で触れるように、地域ぐるみの取り組みも大きな支えとなっている。

4　本県の特徴を生かした地域ぐるみのスポーツ振興

本県はコンパクトな県であり、県内の各地区間の移動にあまり時間がかからない。そのため、開設が少ない種目においても、広域から通学することが十分可能であり、各校の特色ある種目において全国でも成果をあげている。また、前述のように地域をあげて競技をバックアップする体制も多く見られる。

（1）女子柔道金メダリスト田知本遥を輩出した射水市

本県の人口は、110 万人を切る小さな県ではあるが、冒頭でも触れたように、リオデジャネイロオリンピックでは２名の金メダリストを輩出した。その一人、田知本遥選手を育てたのが射水市であり、とりわけ小杉地区は柔道の町として全国に知られている。柔道が地域に根ざした背景としては、地域ぐるみの選手強化の取り組みがあげられる。地域の少年柔道クラブの活動も地道に続けられており、地元小

ﾛﾝﾄﾞﾝｵﾘﾝﾋﾟｯｸ壮行(小杉高校)

杉高校の出身者が中心となって小中高と指導者が連携を図り段階的に効果的な指導を行っている。また射水市は施設面も充実しており、全国高校総体などの全国大会をはじめ、各種の強化練習会や講習会を開催してきている。射水市柔道連盟の役割も大きく、大会や講習会の運営、市や関係団体等との連絡調整等重要な役割を担っている。射水市あげての支援で国内外で活躍する多くの選手を育ててきた。

（2）春中ハンド開催のハンドボールのまち氷見市

春中ハンド開会式（氷見市ふれあいスポーツセンター）

本県のハンドボール競技は、中学・高校ともに全国大会における輝かしい実績があり、その歩みは、氷見高校での昭和33年富山国体を目指した選手強化に端を発する。小・中・高校ともに全国制覇をはじめ数々の栄光に輝いており、近年では、総務省主体の「スポーツ拠点づくり推進事業」の指定を受け、平成17年度より、毎年3月末に5日間の日程で「春の全国中学生ハンドボール選手権大会」を開催している。「ハンドボールのまち氷見市」をキャッチフレーズに、氷見市職員や市内中学校の全面的な協力体制のもと、県・市協会と一体となって運営にあたっている。高校生も、昇り旗の設置や大会でのオフィシャル補助員等に協力している。

小学生がジュニアクラブでハンドボールを始め、憧れの「ちびっ子ハンドボールフェィステバル」を経験し、中学で「春中」を目指して競技力を鍛え、さらに複数の高校へ進学して活躍しており、一連の取り組みが強化・普及に大いに貢献している。また、県内教職員や民間の指導者にも「春中」「ちびフェス」の経験者が育ってきており、競技レベル向上への好循環を生んでいる。

（3）ホッケーのまち小矢部

第47回全国高校総体優勝　石動高校女子

本県では、ホッケー競技も地域に支えられてきた競技の一つである。石動高校が中核となり、小・中・高校のそれぞれにおいて全国大会で数多くの優勝を成し遂げてきた。「ホッケーのまち小矢部」として全国的に知名度があり、普及と強化が進んでいる。小矢部市や協会が中心となり、普及や強化を図り活動している。平成20年には、50周年を迎え、3世代でのホッケー交流も行われ、幅広い世代でホッケーを楽しめるようになった。地元で開催される大会では、若者からお年寄りまで一緒に声援する様子も見られる。アテネオリンピックから4大会連続でオリンピック選手を輩出し、市出身の選手が出場するまでに至っている。

5　富山県の選手育成事業

本県の運動体育・スポーツ振興は、昭和33年の富山国体、平成12年の2000年とやま国体を経て、積極的に取り組まれてきた。近年のジュニア育成に当たっては、富山県と県体育協会を中心に「発掘・育成・強化」をテーマに、「競技スポーツ振興事業」「未来のアスリート発掘事業」「元気とやまスポーツ道場」「中学・高校運動部スーパーコーチ派遣事業」「TOYAMAアスリートマルチサポート事業」などが実施され、選手の発育・発達段階に応じた科学的なサポートが行われ、全国大会での成果向上に結びついている。

6　まとめ

今後の検討の方向性として以下の５点を確認し、まとめとしたい。

（１）さらなる魅力創出は「みんなと楽しく」

今回提示した中高の経年調査では、中高生の男女ともに「みんなと楽しく」活動できることが、満足度合いを高める最も大きな要因であった。11 月に開催した本県高等学校体育連盟の研究大会においても、指導助言いただいた富山大学の福島准教授から「多様なスポーツを体験できる部活動を選択肢に加えるなど、生涯スポーツや健康増進の観点からも柔軟な発想が必要である」とご教示をいただいた。

また「運動技能の向上－そして試合出場－さらに勝利」の好循環がスポーツの特性であり、「みんなと楽しく」活動するなかで、スポーツそのものの魅力を十分体感できることが満足度や継続性を高めていくと考えられる。

（２）活性化の鍵は「女子の運動部活動の見直し」

女子の運動部活動の加入率は、中高で一貫して男子より低く、高校女子では運動部の加入率が文化部を下回っている。女子が活動しやすい環境を整えることができるかが、今後の運動部活動活性化に大きな影響を及ぼすと考えている。

（３）夢や希望を叶える「連携拡大」

中学生には高校の運動部活動に対する大きな期待とともに不安がある。中学生に高校での運動部活動の実際を丁寧に説明するなど、不安を払しょくする配慮が必要である。また高校生アスリート育成の面からも中学・高校間等の学校間連携や地域、協会、体育協会等との幅広い、有効な連携・協力体制をさらに発展させていくことが肝要である。

（４）チャレンジ精神を活かす高校生設置系種目の推奨

種目の継続性も大切であるが、多くの中学生は新たな高校生活に大きな夢や期待を抱いている。中学校までなかった新種目・高校設置系種目は未知の可能性にチャレンジする格好のチャンスとなる。本県では高校設置系各種目の輝かしい実績があり、新しい種目にチャレンジしやすい環境を整えることが重要である。

（５）現場は目の前にある

最後に、教員の多忙化や指導の行き過ぎを指摘する声をよく聞くが、日本の教育や青少年の健全育成に、運動部活動は大きな役割を果たしてきたと確信している。学校運動部活動は世界に誇れる日本の学校文化であり、社会が大きく変化するなか、その役割はますます重要になると考えている。その文化を継承する第一線に我々教員がいる。現場は目の前にある。人は人とのかかわり合いのなかで育つ。生徒が答えた「みんなと楽しく」の声は、「一人じゃない、みんなで楽しもう」とのメッセージである。その声に応えるのが我々、大人の使命だと思っている。

研究推進にご協力いただいた方々に厚くお礼申し上げるとともに、今後の一層のご指導を心からお願いしたい。

田知本選手・登坂選手祝勝パレードから

未来のｱｽﾘｰﾄ発掘事業…ｽﾎﾟｰﾂ栄養講座